

「能生白山神社」・「春季大祭」 ― 年表 ―

時代	年号（西暦）	能生白山神社関連
	三世紀後半	・人皇十代崇神(すじん)天皇十一年十一月初午の日、白山神社が勧請されたとされ、奴奈川姫を祭神とし、奴奈川神社と称すと伝えられる。能生郷の産土(うぶすな)の社として創立された。その昔、奥社は高志峯（大沢岳ともいう）、即ち銚ヶ岳の一峯権現岳にあり、後に現在地に移ったものと考えられている。（社伝） 〔参考：丸山元純輯(しゅう)『北越風土記節解』（貞享3年・1686）（「卷之一上」の「山」・権現山の項）に「昔ハ大沢嶽ノ絶頂ニ権現社アリ。後ニ能生駅ニ移シ奉ルトモ。永享ノ頃ヨリ天王寺舞楽ヲ移ス。」とある。又、明治7年教部省神名帳算定資料の中で能生白山神社の由緒として「奴奈川保内大沢庄能生鎮座奴奈川神社之儀、人皇十代崇神天皇十一年十一月初午ノ日御鎮座シテ・・・」と記されている。保：平安時代の所領単位で荘、郷と並ぶもの。庄：荘園と同じ。〕
飛鳥時代	文武天皇の代 大宝2年(702)	・一説にはこの年に鎮座し、奴奈川神社と称すと伝えられている。（社伝）〔参考：「文武天皇大宝二年創立ト云伝フ、亦崇神天皇十一年勧請トモ伝フ」（西頸城郡誌）〕
奈良時代	元正天皇の代 (715～724)	・泰澄大師（682～767）がこの時代、当社に錫をとどめ、両部習合（神仏調和の神道）に改めたと伝えられている。爾来白山権現又は白山三所権現と呼ぶという。
平安時代（七八四～一一八五）	延長5年(927)	・『延喜式』神名帳（延長5年・927完成）記載の式内社頸城十三坐の内、奴奈川神社は当神社であると伝えられる。西頸城郡内には奴奈川神社論社として「一の宮奴奈川神社」・「田伏奴奈川神社」等があり、諸論あって未だいずれとも定め難い。
	寛弘年間 (1004～1012)	・この頃、加賀白山から分霊し、旧社に合祀したと伝えられている。（社伝） 〔平安中期以降の仏像（木造聖観音・銅造十一面観音・多数の懸仏等）が社宝として所蔵されており、この頃両部習合の白山権現となったとも考えられる。〕
	長寛元年(1163)	・この年に書きとめられた加賀一の官・白山比咩神社（石川県鶴来町）の記録、『白山之記』の九ヶ所の末社名の中に「ノウノ白山 越後」の名前がある。（白山比咩神社叢書等）これは能生の地名が史上に見い出される最初のものである。
	元暦2年(1185)	・白山神社はこの年の秋、現社地東方、小泊との境の山崎の地へ遷座したと伝えられる。〔参考：『明治18年奴奈川神社由緒書上書』に「風土記ニヨルニ 奴奈川神社高志峰ニ在リ云々柳形社ト号ス 元暦二年秋山崎ニ遷座アリト載ス 之ヲ以テ考スルニ 神代ニ鎮座アリシ高志峰ハ能生谷ニアリ 夫ヨリ何ノ世ニカ柳形ニ遷シ柳形神社ト称シ 以後元暦ニ至リ 更ニ山崎ニ遷セシナリ…右ハ古来ヨリ口碑ニ伝フル処ヲ古書ニ徴シ書上候」とある。〕
鎌倉時代（一一八五～一三三三）	文治3年(1187)	・九郎判官源義経が奥州下向の途次、能生を通り村田家に泊まると伝えられる。同行の常陸坊海尊が追銘の「汐路の鐘」が神社に伝わる。その折り、当社に誓願のため奉納したと伝えられてきた大般若経巻壹巻が現存する。 （参考：『義経記』に「能ノ山ヲ外処(ほ)ニ伏拝ミ給ヒテ」の一文がある。）
		・参考：白山権現を別当として支配した能生山太平寺がいつ頃から存在したかは、文書等の焼失により推察するのみであるが、長享2年（1488）に僧・万里が能生に滞在した時の日記『梅花無尽蔵』の記述の中に能生山太平寺の存在が知れ、鎌倉時代頃がその始まりと考えられる。七堂伽藍を有し、五十余坊、七十五ヶ所の撰社・末社を支配し、能生谷を含めて三千石を所有していたと伝えられている。『梅花無尽蔵』には「越之後州、能生山太平寺ハ、廻(すなわち) 泰澄大師行道之地ナリ。而シテ鎮守白山廟ニ椿ノ故事有リ」と記されている。（「椿ノ故事」については不詳）能生山太平寺の所在地は礎石等無く、今もって不明である。
時代不詳		・当神社が石動山から勧請したという説も伝えられている。 〔参考：森田平次遺稿『能登志徴』（昭和13年）には、「能生中山権現の祭礼は、三月二十四日なり。能州石動山の祭日と同時に。石動山の祭は朝、能生は昼よりの祭也。朝の間は能州の方へ風吹き、昼よりは能生の方へ風吹くよし。是に依て能州と能生の間、舟の往来心易きとなり。此風を神風といふ。故に此日は能州への舟往来一日の内になせり。俗伝に、夫婦の神なりと云。」の記述があり、また『訂正越後頸城郡誌稿』（豊島書房・昭和44年刊行）には、「当社古跡ハ、本権現山頂上ニ鎮座ニテ、能州石動山鎮座ノ白山権現ヲ勧請セシモノト云」と記されている。（次頁へ）

時代	年号(西暦)	能生白山神社関連		
時代不詳		<p>(前頁より)石動山(せきどうさん)は「いするぎやま」とも呼ばれ、石川県中能登町、七尾市、富山県氷見市にまたがる標高565mの山で、泰澄大師開山とも伝えられる。奈良時代以来、石動山全体が北陸修験者の能登の中心地であった。「石動寺」(戦国時代以降の「天平寺」)を中心に盛時には360余坊を擁した。山の中腹に「伊須流岐比古神社」(鎌倉時代以降「五社権現」とも称される)がある。・気多大社との関連も残されている。〔口碑：気多大社の「鶴まつり」の鶴が、当神社大祭の日、弁天岩横の「一つ岩」に必ず飛んでくる。参考：『西頸城郡誌』(名著出版・昭和5年刊行)に「鶴を海中に放つに、此鶴きはめて越後国中山の神社能生権現の磯に寄る 其時能生権現の祭礼なり」(能登名跡志)と記されている。〕</p>		
時代	年号(西暦)	能生白山神社関連	春季大祭関連	
室町時代(一三三三～一五七三)	永享年間(1429～1441)		・現在に演じられる能生白山神社舞楽は、永享の頃能生重立衆が大阪へ赴き、四天王寺に伝わる舞楽中から習得伝承したものと伝えられている。	
	文安3年(1446)	・宇多兵衛国宗作(文安三年五月十三日銘)の宝剣が奉納された。		
	寛正6年(1465)		・陵王古面二面中の一面が作られた。裏面に次の様な朱書がある。 「阿弥陀山日光寺寛正六天乙酉大工国重良弥賢論」(日光寺は糸魚川市早川)	
	文明10年(1478)	・小泊六社人先祖の伝説とされる『白山神社旧記・水嶋白山縁記』が書かれた。文明十年三月池田正連の銘記がある。		
	長享2年(1488)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>口碑：往昔、四月頃海岸吹き来る西風に乗じ、能登半島の沖より海路当地へ着されし神あり。御供申したる者今に家名を治部、式部、民部、兵部、刑部、大部と称し其数六戸あり。即、神を権現山の嶺に泰安し、六名も屋敷を其下段に設け、後漁業に従事し、東麓の小泊に移転する。(『西頸城郡誌』)</p> </div>	・京都相国時の僧・万里集九が能生に来て、能生山太平寺に6ヶ月間滞在する。(長享2年10月18日～3年4月29日)万里の紀行日記『梅花無尽蔵』長享二年十一月二十七日の項に、「煮桃花粥太平寺之鎮守白山権現来歳三月念二三兩朝有祭祀之童舞」と記されている。来歳三月念二三：毎年3月22、23日(旧暦)	
	明応	6年(1497)	・白山神社に火災があり、諸堂、社殿等を焼くと伝えられている。(社伝)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>参考：中居の鑄工は天正、慶長の頃には受領の工人40名に達したほど盛大なものであった。しかしその多くは製塩用の鉄釜を始め日用の鉄器を製作したものらしく、その梵鐘の遺品で今日知られるものは、「汐路の鐘」の他に飛騨高山・千光寺の天文15年(1546)の鐘と能登羽咋・本念寺の永禄9年(1566)の鐘の二口に過ぎない。(『越佐研究』第23集・坪井良平著)</p> </div>
		8年(1499)	・火災により焼亡した「汐路の鐘」の残銅をもって、新しく鐘を鑄造したという。能登国中居浦(石川県穴水町中居浦)、大工藤原国次、次郎左エ衛門尉、明応八年七月等の銘が鐘に刻まれている。	
		文亀3年(1503)	・劔社を造立(尾山に社殿跡あり)(棟札・文亀三年五月六日)	
		永正12年(1515)	・神社本殿造立。三間社流造・一間向拝付・柿葺(にがらぎ)・附棟札四枚(昭和33年5月14日重要文化財指定) 棟札(重文)：永正十二年三月十六日還宮・畠山殿義元二万疋寄進。疋：銭を数える語(参考：能登國守護・畠山義元の寄進は上杉との関係が考えられる。)	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>参考：「還宮」の意味については従来尾山社殿跡からの移転と考えられていた。しかし、昭和35年から36年に亘り一年の歳月をかけて本殿の解体修理を施行した際、本殿の西側から円柱当り型のある焼けた礎石四個が出土した。このことから「還宮」の意味するところは、明応6年の火災の後、一時他所へ移転した本殿を再び現在地に戻したものであろうと推論される。(焼けた礎石四個は明応の火災のものと思像できる。)</p> </div>
		大永4年(1524)	・泰澄大師坐像が白山神社に残る。	
	永禄3年(1560)	・上杉謙信が太刀一口寄進したと云う。		
安土桃山時代(一五七三～一六〇三)	天正	天正年間(1573～1592)		
		<p>・本殿(大宮権現)藁葺き上葺 棟札写：上杉景勝家臣・直江山城守の奉納による。 ・太刀奉納：直江山城守が当社御修復御建立成就の上、武運長久の為奉納したもの。</p>		

時代	年号 (西暦)	能生白山神社関連	春季大祭関連
安土桃山時代 (一五七三～一六〇三)	天正 4年(1576)	・長沢将監 (能生町藤崎・長沢寺)、白山神社に馬具奉納。(長沢将監については、「能生町史・上巻」207P 参照)	<p>参考: 旧大島氏の古書に白山社領は上杉氏の時には二百貫余の土地を有し、衆徒も二十二院を数へしが、会津移封の後、堀氏の時領地の全部を没収し、祭祀料として僅かに七石を給はる。当時多くは離散し、実相院、普門院、密乗院の三院二寺も廃絶せり。徳川氏に至り、検地奉行大久保石見守より五十石を寄附せられ、慶安年中に至り更に御朱印状を下附せらる。(『西頸城郡誌』名著出版・昭和5年刊行)</p>
	文禄5年(1596)	・本殿修理 (上葺) (棟札・重文)	
	3年(1598)	・上杉景勝会津移封に伴い、社領を没収され、祭祀料が七石となり、白山権現は衰退した。(上杉遺民一揆起こる。) ・堀久太郎秀治(豊臣秀吉の直臣)より高七石壺斗四升三合の除地寄進があった。	
江戸時代 (一六〇三～一八六八)	慶長 5年(1600)	・「西浜神領覚」に能生権現七石とある。	<p>秋葉神社は江戸時代、薬師如来が安置され薬師堂と呼称された。「御祭礼入用帳」(安政2年・1855)では「薬師堂」は「講堂」と記されており、又「講堂」を「拝殿」とすると、6年後・元和6年の拝殿修理は期間が短かすぎ、この建替は「薬師堂」の建替えと考えられる。</p>
	16年(1611)	・検地奉行大久保石見守、五十石の寄進をした。(大王三十石、大道寺十六石、指塩四石) 以後、白山権現の復興がなされた。	
	18年(1613)	・小白山社立替 (太平寺実相院蔵「修理覚」、小白山社々殿跡は不明。)	
	19年(1614)	・劔社葺替・講堂(薬師堂か?) 建替 (太平寺実相院蔵「修理覚」)	
	元和 4年(1618)		・糸魚川屋彦十郎が陵王面の赤熊毛 (しゃぐま) を寄進した。裏面に墨書の麻切れが縫いつけてある。 「元和四戌午天三月二十三日彦十郎糸魚川屋寄進也」
	6年(1620)	・拝殿修理 (太平寺実相院蔵「修理覚」)	
	5年(1628)	・御興堂 (御旅所) 建替 (太平寺実相院蔵「修理覚」)	
	寛永 8年(1631)	・本殿修理 (棟札・重文及び建物痕跡) 極木一部打替・海老虹梁補加・桧皮葺 (参考: この棟札には「奉新再興白山妙理三社権現祠一察」と記され、この年に三社合祀されたとも考えられる。「察」は屋内に祭るの意があり、「三社権現祠一察」は三社の祠を一つの屋内に祭ることと考えられる。) ・木造狛犬(宝物殿収蔵)は、この年の作か?	<p>本殿(永正12年・1515 造立)の身舎(母屋)前面にある三ヶ所の<small>かふるまた</small>臺股に、十一面観音・聖観音・不動明王の梵字が削り取られた跡がある。このことから、本殿造立当初より三社は合祀されていた可能性が考えられ、左の説には疑問が残る。 * 三社権現 ・大宮権現 (本殿) 祭神・伊弉那岐命 本地仏・十一面観音 ・小白山権現 (存在場所不明) 祭神・菊理媛命 本地仏・聖観音 ・御劔権現 (尾山に社殿跡あり) 祭神・大己貴命 本地仏・不動明王</p>
	正保 2年(1645)	・松平越後守光長(高田城主)が五十石寄進。	
	3年(1646)	・御朱印再領につき高野山より添状頂戴する。(江戸時代、宝光院は高野山明王院の末寺)	
慶安元年(1648)	・将軍徳川家光(三代)から五十石の御朱印状が下附された。(2月24日)		
承応2年(1653)	・宝光院祭祀を怠り、宝光院と実相院との間に白山権現管理争の訴訟おこる。		
寛文5年(1665)	・将軍徳川家綱(四代)から五十石の御朱印状が下附された。(7月11日) ・「白山社領管理訴願」、実相院敗訴となる。		
延宝8年(1680)	・汐路の鐘、大雪のため破損した。汐路の鐘刻銘の中に「延宝八大雪之節損其後鑄掛」とある。		
天和3年(1683)	・御旅所再建 (加藤家文書)		
貞享 2年(1685)	・将軍徳川綱吉(五代)から五十石の御朱印状が下附された。(6月11日)	<p>・『北越風土記節解』(丸山元純良陳著): 能生に関する文中に「永享ノ頃ヨリ天王寺舞楽ヲ移ス」の記述あり。</p>	
3年(1686)			

時代	年号(西暦)	能生白山神社関連	春季大祭関連	
江戸時代(一六〇三〜一八六八)	貞享	4年(1687)	・定書「白山権現御神事の節獅子舞役之儀」(この時より小見村で獅子を舞う。それまでは、小泊社人中が引き受けて舞っていた。人手不足のため渡す。)	
		5年(1688)	・本殿大修理(棟札・重文及び建物痕跡)(軒廻、床縁、高欄一新。こけら葺。)	
	元禄	2年(1689)	・松尾芭蕉が奥州北陸廻遊(『奥の細道』)の折、7月11日(旧暦、陽暦では8月25日)能生駅大島某の許に杖を留め、書き残した句が伝えられている。「曙や霧にうつ満くかねの声」芭蕉(参考:「汐路の鐘碑掛軸」では大島某に杖を留めとなっているが、随行曾良の日記では玉屋方に宿となっている。)	
		7年(1694)	・本殿修理(墨書)	
	宝永4年(1707)		・御旅所再建(加藤家文書)	・御祭礼 御公儀(幕府を指すか?)御停止に付、三日日延、二十六日に執行
	享保	3年(1718)	・将軍徳川吉宗(八代)から五十石の御朱印状が下附された。(7月11日)	・享保年中より元文年中まで、糸魚川城主松平日向守より御寄進の、葵御紋付白帳御水引を用ふ。
		7年(1722)		・天冠4個 寄進 岡本五右エ門 八月吉日
		12年(1727)	・薬師堂(秋葉神社の江戸時代の呼称)、舞台の両者再建(加藤家文書)	
		15年(1730)	・「白山大権現」額 寄進 岡本五右エ門 ・「辨財天」額(厳島神社の旧額) 寄進 松平河内守(糸魚川城主)内 高城安能(両額とも江戸中期の能筆家・佐々木文山の揮毫)	
	元文	3年(1738)		・元和四年(1618)寄進の赤熊毛、毛悪敷なり取替え。 寄進 岡本治部右エ門(現在使用中)
		5年(1740)	・延宝八年大雪の節破損した「汐路の鐘」を鋳直す。願主 春日山住 岡本庄助	・舞衣胴着(薄絹織 友禅染) 寄進 岡本五右エ門
	寛保	寛保年間(1741~44)	・この頃、白山神社に火災があったと伝えられている。古記録等が焼失した。	・赤地金襴水引用う。 参考: 岡本五右エ門家四代目治郎右エ門憲郷の姉トヨが庄兵衛という人を婿養子にもらい、今町(直江津)へ分家(元禄5年)。寛保元年、春日山林泉寺門前に移住。岡本庄助は庄兵衛、トヨの子と目される。(室川右京資料より)
		元年(1741)	・京都吉田殿より「国々所々神社御尋之御仁被参ニ付、能生白山権現三社書上申候」(「慶長以後年代記」にあり。この年代記については『翡翠・第6号』参照)	
		3年(1743)	・白山神社境内に「加州三度会所当所氏子中」寄進の銘刻のある、加賀前田侯定紋梅鉢紋入り石燈籠が奉納された。三度会所:月三回飛脚の詰所	「汐路の鐘」の変遷 ・文治3年(1187):「常陸坊の追銘とかや」(碑文) 義経、弁慶、常陸坊東国下降の際、無銘のこの鐘に常陸坊が「汐路の鐘」の銘を贈った。(口碑) ・明応6年(1497):神社に火災あり、鐘楼と共に焼け落ちる。(社伝) ・明応8年(1499):焼けた鐘の残銅を使い、能登國中居で新しく造り直す(鐘銘) ・延宝8年(1680):大雪のため破損(鐘銘) ・元文5年(1740):柏崎にて修繕する(鐘銘) ・明治元年頃:廃仏毀釈に際し大破され、橋場某家の床下に放置される(口碑) ・大正4年(1915):「お開帳」に際し、町の有志により秋葉神社に安置(口碑) ・昭和17年(1942):供出除外物件と認定され、供出を免れる。
	延享4年(1747)		・将軍徳川家重(九代)から五十石の御朱印状が下附された。(8月11日)	
	宝暦	5年(1755)	・拝殿(現拝殿)、舞台の両者再建(太平寺宝光院歴住過去帳)	
		11年(1761)	・田伏村へ祇園神輿を譲り渡す。	
		12年(1762)	・将軍徳川家治(十代)から五十石の御朱印状が下附された。(8月11日)	
	明和	3年(1766)	・泰澄大師千年忌の開帳が行われた。(7月7日~18日)	

時代	年号(西暦)	能生白山神社関連	春季大祭関連	
江戸時代(一六〇三〜一八六八)	明和	3年(1766)	・白山神社に「はがせ船図絵馬」額が奉納された。寄進 岡崎源左エ門 七月吉日(お開帳を記念しての奉納が考えられる)	
		8年(1771)		・紺地金欄紋付水引用う。
		9年(1772)	・木造狛犬(拝殿上段の間)奉納 ・木造随神一対二体(秋葉神社)奉納	
		安永4年(1775)	・御旅所(三方流造茅葺)再建(太平寺宝光院歴住過去帳)	・三社の神輿再建(太平寺宝光院歴住過去帳)
	天明	5年(1785)		・錫杖 <small>しゃくじょう</small> 新作:「毎年三月二十四日神事所持」の銘あり。宝光院住職大祭で使用
		8年(1788)	・将軍徳川家齊(十一代)から五十石の御朱印状が下附された。(9月11日)	
	寛政	3年(1791)	・白山神社鳥居(二の鳥居) 寄進 小泊村 山野刑部(7月) ・白山神社石階段 寄進 岡本五右エ門・他十八名(8月)	
		8年(1796)	・舞台再建	
		9年(1797)		・「御祭礼童舞役配」あり。(木浦西性寺に遺る・宝物殿に展示)
		12年(1800)	・白山神社に和耕俳諧発句額を奉納	
	文化	2年(1805)		・獅子舞衣服(衣反)寄進 小見村若連中
		3年(1806)	・本殿修理(棟札)	・『明禪楽譜集』成る。村田百畝著(能生舞楽最初の舞楽所作法集)
		8年(1811)	・『泰澄大師千五十年開帳供養之録』成る。宝光院15代院主有祥筆 ・泰澄大師1050年忌の開帳が行われた。(白山権現並弁財天お開帳7月18日~29日)	
		11年(1814)	・舞台再建(修理か?) (加藤家文書)	
	文政	2年(1819)		・色上げ張替え両袖取替え(元文5年寄進の古衣装薄絹織・加賀友禅の両袖を取り替える) 寄進 岡本五右エ門・杉田庄エ門
		3年(1820)	・拝殿前灯籠一対石台唐金(からかね・青銅)寄進 金剛院弟子 哲心	
		5年(1822)	・白山神社境内社務所前に「汐路の鐘」石碑を建立 寄進 岡本五右エ門 ・「汐路の鐘碑掛軸」高田藩士・平北共書(石碑建立の由来が書かれている。)	・猩々緋紋付水引用う。(昭和61年まで使用)寄進 岡本五右エ門 紋:三ッ巴四ヶ、三ッ丁子四ヶ 長さ:五丈一尺、巾二尺二寸
		8年(1825)	・舞台建立(『明禪楽譜集(舞楽所作法)』にあり)	・「御祭礼作花記録」の写し成る。作花棟梁方 岡本元泰筆
		13年(1830)	・御室御所(京都仁和寺)総法務宮から社号額一面(「白山大権現」)を賜った。(参考:仁和寺は真言宗御室派の総本山であり、宝光院との関わりがあった。)	
	天保	4年(1833)		・御祭礼舞童装束 寄進 宝光院 法印 信雄
		5年(1834)	・御室御所から社殿御簾の寄進を賜った。	
		10年(1839)	・将軍徳川家慶(十二代)から五十石の御朱印状が下附された。(9月11日)	
		12年(1841)		・「御祭礼入用入足覚」あり
		13年(1842)	・薬師堂(現秋葉神社)再建(太平寺宝光院歴住過去帳)寄進 宝光院 普明	・「舞童役配」あり
		弘化4年(1847)		・二十一日より二十九日まで御公儀御停止に付四月一日に御祭礼をなす。

時代	年号 (西暦)	能生白山神社関連	春季大祭関連	
江戸時代 (一六〇三～一八六八)	嘉永	3年(1850)	・「花本大明神石碑」岡本五右エ門 才蔵山に建立 (花本大明神:芭蕉の神号)	
		5年(1852)	・大絵馬額 (米庵作か? 現拝殿) 奉納。 ・お開帳 (5月16日～25日)	
	安政	2年(1855)	・将軍徳川家定(十三代)から五十石の御朱印状が下附された。(9月11日) ・御神水竜頭口 寄進 糸魚川町大野屋	・『御祭礼入用帳』:宝光院代官・加藤五十吉、古書を写す。 ・『白山神社舞楽所作法』:宝光院代官・加藤五十吉、古書を写す。(文化3年の『明禋楽譜集』か?) ・太鼓場寄附 寄進 伊藤庄右エ門、伊藤善六、杉田栄左エ門 ・「舞童役配」あり
		4年(1857)	・白山神社へ石獅子(二疋)を奉納(二の鳥居両側) 世話人 当所地引網中、小見村中 ・御神水手洗盤 寄進 当所四十物中・地引網人中 願主:糸魚川大野屋源右エ門 石工 尾道・山城屋想八	・獅子衣服(衣反) 寄進 小見村若連中より 安政4年、能生川の東岸台場で大鯨一匹(身の丈28間3尺・約50m)打ち上げられ、記念に当所四十物(塩魚類)商人、緋の大旗奉納す。(大正4年『白山神社略史』)
		5年(1858)		・御神嚮行列大旗(旧大旗) 寄進 当所四十物中 ・『白山祭礼棧敷場貸付証文・絵図面』成る。 ・神輿三体製作 大阪心齋通本町北入細工所 鎌田常右エ門
	万延元年(1860)	・将軍徳川家茂(十四代)から五十石の御朱印状が下附された。(9月11日)	・小泊社人、庄屋連名の「御願」がある。(獅子舞を小見村より小泊へ返還いただきたい旨の願いを奉行所へ出す)	
	文久		・石玉橋が奉納される。	
		2年(1862)		・四月祭礼 御公儀の達しにより二十六日に日延べ。(加藤五十吉家文書)
	元治2年(1865)		・「獅子一条に付手続扣置」 代人 市郎右エ門、庄右エ門 (小見村から小泊に獅子舞が返還された) ・「舞童役配」あり	
	慶応4年(1868)	・太政官 神仏分離令を発する。(3月17日) ・「諸事日並扣(ひかえ)」 宝光院代官加藤五十吉、京都白川殿へ光明院の再興と白山神社の宮司祠官の依頼に出かけた時の記録(4月～6月) 『翡翠』第7号47p参照	口碑:「汐路の鐘」は明治維新の際、廃仏毀釈で捨てられた後、鐘を溶かそうとして、鐘の内に炭火をつめて丘の上から落としたため大破した。他へ売る話もあったが、橋場の某家の床下に放置されていた。大正4年8月の「お開帳」の時、町の有志のとりはからいで白山神社に保管されるようになった。(同年6月に書かれた『白山神社略史』には、「梵鐘、句碑は有せしが、今はなし」と書かれ、6月の時点では神社に鐘が無かったことが裏付けられる。)	
明治時代 (一八六八～一九二二)	明治元年(1869)頃	・廃仏毀釈により「汐路の鐘」破損されると伝えられる。〔又、この頃薬師堂(現・秋葉神社)の薬師如来、光明院へ移されたか?〕		
	3年(1870)	・宝光院々主復飾し、能生正親と改名。 宝光院より白山社地に移る(5月)		
	4年(1871)	・舞台修理(あるいは再建か?) ・白山社領五十石を奉還	・『御祭禮舞楽振控入』伊藤庄八郎著 『明禋楽譜集』(文化3年)を写す。	
	5年(1872)	・白山権現は別当寺・能生山太平寺宝光院より分離し、旧柏崎縣郷社となる。		
	7年(1874)	・新潟縣村社となる。 ・本殿修葺(棟札)	・「白山神社神器神宝取調べ書」:当社舞楽伝来は永享二年頃より始まると申し伝うとある。	
	8年(1875)		・「獅子舞議定書之事」:小泊総代6人より能生町神事世話係3名宛。(小泊と能生が一年毎に舞うと記されている。)	

時代	年号 (西暦)	能生白山神社関連	春季大祭関連	
明治時代 (一八六八～一九一三)	明治 11 年(1878)	・明治天皇巡幸の折、糸魚川町池原平十郎家にて陵王古面天覧に供す。(9月27日)	・陵王差披 1 枚 (72 銭) ・中啓 1 本 寄進 伊藤庄八郎	
	12 年(1879)		・陵王舞衣 1 枚 (緋ちり緇・5 円) 寄進 伊藤庄八郎	
	13 年(1880)	・前島密 扁額寄付 (拝殿) (当地に一泊)		
	14 年(1881)	・出雲国造・千家尊福 和歌揮毫奉納	・「楽人会定書」(稚児合宿中の約束事)	
	16 年(1883)	・「当社御筒粥之事」伊藤庄八郎著 ・「汐路の鐘石碑」(文政 5 年・1822 建立)売却: 明治維新の廃仏毀釈により神社から岡本家前庭に移した石碑が、岡本家没落により、直江津五智「清水屋旅館」に売却された。後年、この旅館は高田市山岸家の別荘となり、「汐路の鐘石碑」は大正 15 年に山岸家より神社に返還奉納され、現在地に設置された。	・明治 15, 16 年太鼓張替えのための寄附金積立て ・黒ぬり笛 2 本、よこ笛 3 本購入	
	17 年(1884)	・お開帳 (6 月 28 日～7 月 7 日)		
	18 年(1885)	・祭神: 菊理媛命 <small>くくりひめのみこと</small> (白山比咩大神) から奴奈川姫命 <small>しらせまひめ</small> に変わる。	・「陵王の舞 自分の振を控」伊藤庄八郎著	
	19 年(1886)	・八坂輿殿 柿葺 二坪二合建立 (平屋普通造り) ・『他見無用帳』 加藤徳三郎、『御祭禮入用帳』・『明禪楽譜集』を写す。		
	21 年(1888)		・「舞台掛け」は 4 月 18 日の実施となる。(江戸時代以来、明治 20 年までは 21 日に舞台掛けが行われてきた)	
	23 年(1890)	・元田永孚 扁額寄付 (拝殿)		
	26 年(1893)	・前島 密 扁額寄付 (拝殿)		
	28 年(1895)	・拝殿天井張替え (明治 27 年) 寄進 加藤善治郎	・社参の行列、仲小町の小学校より出発。明治初期は宝光院より。28 年までは不明。江戸時代から明治初期にかけて舞楽稽古は宝光院 (現 光明院) で行った。	
	29 年(1896)	・御朱印状 10 通、中能生村字大沢 瀧川善三郎氏より氏子総代預かる。(4 月) (御朱印状は高田城主榊原殿が所蔵していたが、御家従中老職の清水広博氏へ預けられた。清水氏が東蒲原郡長在勤の時、氏は能生出身の瀧川氏に預けた。)	添書: 能生白山権現領 一、徳川家旧御朱印 拾通 但箱入 右者高田城主榊原殿御蔵書之處 御家従中老職清水広博氏へ御預ケ相成 其後同氏東蒲原郡長在勤ニ付 該書拙者へ御預ケ相成候処 白山社ハ貴町之土産神ナ苗ニ因 前記之御書白山社之神宝ニ加へ置度旨懇請ニ応シ 即御預ケ申置候仍而如件 明治二十九年四月 西頸城郡中能生村字大沢 瀧川善三郎 印 同郡能生町白山社 氏子総代 渡辺利平 殿 伊藤伊与吉 殿 伊藤新平 殿	
	30 年(1897)	・秋葉神社瓦屋根となる。 発起人 伊藤伊与吉、伊藤新平、渡辺利平、加藤善治郎		
	35 年(1902)	・本殿修葺 (棟札)		
	36 年(1903)	・お開帳 (臨時)		
	37 年(1904)	・十五代将軍徳川慶喜揮毫 社号額「白山神社」 寄進 伊藤伊与吉、加藤善治郎 (東京へ出向き揮毫を願う。) ・尾山「能生中山保安林」となる。		
	38 年(1905)	・本殿修理 内部天井張替 (棟札及び墨書)		
	39 年(1906)	・木造聖観音立像が旧国宝に指定される。(4 月 14 日)		・「獅子舞契約書」あり (西部と東部の若者の間に諍いあり、板玉橋で西部、東部が交代して舞った)
	40 年(1907)	・本殿修葺 (棟札)		
大正時代	大正元年(1912)	・一の鳥居に連なる石玉垣竣工 (10 月)		

時代	年号(西暦)	能生白山神社関連	春季大祭関連
大正時代(一九一三～一九二六)	大正2年(1913)	・尾山の発掘により仏像・懸仏ほか出土(10月30日)。文亀3年棟札「劔社」の社殿跡の下方の杉林(鬼舞伊藤家地所)より出土。	・社参の行列、旧役場より出発。
	3年(1914)	・本殿石玉垣改築(大正2年) 寄進 中村千代吉、竹島吉治郎	・村社白山神社「舞楽楽人会総会決議録」作られる。 ・童羅利装束1組、稚児稽古着5組(計33円) 寄進 伊藤博治、室川鼎、加藤善治郎、村田喜代松、加藤為八郎
	4年(1915)	・お開帳(8月23日～31日) ・石階段改築(8月) 寄進 伊藤博治 ・社務所建立 ・『白山神社略史』成る。	・木造玉橋(用材社費、職工料6円) 寄進 能生町大工 松尾力蔵、大金千代吉
	5年(1916)		・中啓5本 寄進 伊藤博治 ・児抜頭差抜 寄進(不明)
	6年(1917)	・村社白山神社が郷社に昇格した。(4月24日)これを祝って10月にも舞楽奉納 ・『白山神社舞楽所作法』菅原道愛、『明禪楽譜集』を写す。 ・本殿石段改築 寄進 石戸治三郎 ・金四千元 寄進 佐々木浅吉、クニ子(塚田幸三郎次男、函館)(12月24日)	・楽太鼓(33円60銭) 寄進 吉沢忠治 ・大灯堤2個 寄進 塚田ミセ(北海道小湊)
	7年(1918)	・一の鳥居 寄進 高鳥順作(4月13日)	・獅子装束一式(能生谷製白布四反要す) 寄進 能生西部・小町青年会(代金13円) ・舞楽装束新調 寄進 室川鼎以下19名(338円)
	10年(1921)	・本殿修葺(棟札)(4月) ・「西頸城郡資料展覧会」に殆どの文化財を出展(糸魚川高女校8月25～27日) ・石段下 御手洗盤 寄進 氏子中、石工 岡崎千代吉	・社参の行列は旧能生小学校より出発。 ・『祭典年中行事録(春季大祭記事)』成る。
	15年(1926)	・「汐路の鐘石碑」が白山神社境内に戻る 寄進 高田市 山岸愛(3月) ・境内敷石改造	
昭和時代(一九二六～一九八九)	昭和3年(1928)		・4月9日小泊大火のため祭礼舞楽中止。
	4年(1929)	石碑の裏面文面： この石はやく我家にて 氏より故ありて買ひおきしを、能生の村人の御社に鐘のなほ残れるを これいかで奉りてよと、いまるるとこはるれば、古きものうせしめじとてつとめし、先人の心にもかなはむと謹みて納奉る 大正十五年三月 山岸 愛	・御旅所幕1張 寄進 金子磯吉、加藤仁作
	6年(1931)		・陵王赤長下着 寄進 中村兵衛 ・太鼓場腰幕1張 寄進 室川九三郎 ・楽屋用御簾(みす)4枚 寄進 伊藤博
	7年(1932)		・太鼓胴巻1枚・童羅利狩衣1着 寄進 池田喜一 ・童羅利肩衣・差抜 寄進 中村豊作 ・太鼓場上幕1張 寄進 中村以江(春立村) ・稚児緋狩衣4枚 寄進 伊藤義造他3名
	8年(1933)		・夕祭狩衣4枚 寄進 高鳥登 ・納曾利狩衣2枚 寄進 遠田要治 ・童羅利舞衣1枚 寄進 湯尾喜之助
	9年(1934)		・地久狩衣4枚 寄進 大貫美代次、湯尾清司、吉田良平、松尾誠一
	10年(1935)	・本殿修理 向拝柱及び木階取替え	
	11年(1936)	・宝庫 寄進 長岡市 高鳥博(4月) ・お開帳(7月23日～31日)	・稚児の合宿は従来秋葉神社で行われたが、この年より社務所が宿泊所となる。 ・童羅利に稚児守、傘持ちが付き、他の稚児同様となる。お走りにも加わる。(童羅利は従来徒歩で社参した。) ・陵王差抜・狩衣 寄進 中島原吾 ・陵王差抜 寄進 伊藤博治

時代	年号(西暦)	能生白山神社関連	春季大祭関連
昭和時代(一九二六～一九八九)	昭和12年(1937)	・「能生白山神社社叢」が国の天然記念物の指定を受ける。(12月21日)	・童羅利狩衣・差抜 寄進 堀内正 ・舞台花道(橋掛り)腰幕 寄進 田代秀夫他10名
	14年(1939)	・社務所幕一張(17円50銭) 寄進 大貫新一、小島昭治、伊藤章 池亀菊治 ・三種神器、真榊杵、五色旗 寄進 中島原吾	・舞楽音調が低いため祭礼日に拡声器を取り付ける。 ・舞花5本 寄進 中村清吉(6円) ・舞楽用笛5管 寄進 山崎(10円) ・挟箱一对 寄進 池亀市太郎、湯尾正広、池亀菊三郎 ・弓法楽冠(巻嬰冠)4個 寄進 大貫イソ
	15年(1940)	・尾山に指定地境界を示す標柱(境内6ヶ所)設置	・獅子頭(作 滝川美堂) 寄進 梶川与太(小泊出身)300円 ・御神宝、五色旗2本 寄進 小竹義哉 ・能抜頭舞衣(赤黒ちり緬狩衣)、差抜 寄進 遠田文平160円 ・長柄朱傘 寄進 富田重次(2本) 遠田文平(2本) 高橋渡(1本)
	16年(1941)		・太平洋戦争のため祭礼中止となる。
	17年(1942)	・「汐路の鐘」、梵鐘供出除外物件と認定され、供出を免れる。(10月12日) ・「能生ヒメハルゼミ発生地」が天然記念物の指定を受ける。(10月14日)	・太平洋戦争のため祭礼中止となる。
	18年(1943)		・太平洋戦争のため祭礼中止となる。
	19年(1944)	・本殿修葺 箱棟取替、屋根34坪(棟札) (3月20日～31日)	・童羅利、五の戸となる。以後、童羅利は五番目の稚児として弓法楽・輪歌の舞にも加わる。
	20年(1945)		・太平洋戦争のため祭礼中止となる。
	22年(1947)		・五の戸用の天冠購入
	23年(1948)	・金原省吾氏(東洋美大教授)が白山神社々史、本殿、宝物等について講演	
	24年(1949)		・同人誌『汐路』に「白山神社の春季大祭について」岡本孝太郎著が掲載される。
	25年(1950)	・文化財保護法の施行により、木造聖観音立像が旧国宝から重要文化財に指定替えとなる。(8月29日)	・戦後、棧敷席は抽選となる。 ・狩衣一枚 寄進 吉川藤次郎、吉川久吉 ・夕祭狩衣1枚 寄進 青海電化能生地区汽車通勤者有志
	26年(1951)		・『汐路』に「白山神社祭礼解説号」が掲載される。
	27年(1952)	・白山神社本殿が新潟県文化財に指定される。(12月15日) ・お開帳(7月24日～30日)	
	28年(1953)	・文部技官西川新次氏来社。以後多くの役人、学者が聖観音、本殿調査に来社 ・聖観音に、当時としては珍しいアクリル樹脂を体内に注入する、「アクリル樹脂硬化法」による修理が小須戸町茂林寺にて行われた。(文部省・11月)	
	33年(1958)	・白山神社本殿、附棟札四枚が重要文化財に指定される。(5月14日) ・本殿修葺(背面のみ、翌年正面修葺)	・「御祭礼舞楽唱歌集」再編 白山神社楽人会 ・猩々緋大旗 寄進 黒潮会
	34年(1959)	・蛇の水の龍頭が落石により破損し、再建された。(8月) 寄進 村井菊治郎、白石悌治 橋立角治、巻山慶治、楽人連中	
	35年(1960)	・本殿解体修理始まる。(10月1日)	・日月錦旗 寄進 坤和会
	36年(1961)	・本殿解体修理完了(9月30日)	

時代	年号(西暦)	能生白山神社関連	春季大祭関連
昭和時代(一九二六～一九八九)	昭和36年(1961)	・『重要文化財白山神社本殿修理工事報告書』(同修理委員会)発行(10月)	・「白山神社舞楽」が新潟県無形文化財に指定される。(3月20日) ・本殿解体修理のため舞楽中止
	38年(1963)	・早稲田大学名誉教授加藤諄氏(日本の金石文研究の第一人者)、早稲田大学『人文論集』(第1号)に「汐路の鐘」を掲載	・小泊地滑りのため舞楽中止 ・「能生白山神社文化財保存会」発足(5月1日)。「白山神社舞楽保存会」を改名し、規則制定。
	39年(1964)		・新潟県民族芸能基礎調査「能生白山神社の舞楽」(4月23日～25日) 桑山太市、宮栄二、近藤忠造の三氏
	40年(1965)		・白山神社舞楽「陵王」新潟市にて公開(農林中金主催1月10日) ・第6回民俗芸能大会参加。 東京青山日本青年館にて「陵王」公開。(3月13日 関東ブロック1都10県教育委員会主催)
	41年(1966)		・能生小学校文化財少年団規約出来る(2月) ・『越佐研究』に近藤忠造著「白山神社舞楽所作法」掲載
	44年(1969)	・水産庁・石井謙治氏(日本海事史学会副会長)等が「はがせ船図絵馬」の調査に来社。(昭和43年) ・「はがせ船図絵馬」が新潟県民俗資料文化財に指定される。(3月25日)	・白山神社文化財保存会の中に「白山神社文化財少年団」が誕生する。(上記改名・3月23日) ・「白山神社文化財ニュース」第1号発行。(4月)
	45年(1970)	・本殿に自動火災報知機設置(国補助事業)	
	46年(1971)	・『汐路』特別号・「白山神社資料集(1)」が発行される。	
	47年(1972)	・「白山神社の神仏像群五十四点」、「円鏡、八稜鏡」が能生町文化財に指定される。 ・「紺紙金字大般若経一卷」が能生町文化財に指定される。(5月12日)	・文化財保存事業として後継者育成事業始まる。 ・桑山太市著『新潟県民俗芸能誌』に能生白山神社舞楽が掲載される。 ・「古衣装整理報告書」 友禅染職人・竹田耕人(東京在住・能生出身)
	48年(1973)	・宝物殿竣工。 ・拝殿天井裏より多数の船絵馬が発見される。これらは現在、重文指定。 ・国立文化財研究所久野健氏、白山神社文化財(聖観音等)の調査を行う。	・能生白山神社舞楽が選択芸能に指定される。(文化庁、11月5日) ・昭和40年代末頃より稚児の合宿は、前・後半に分かれる。(江戸時代以来、稚児は4月10日に登社し、22日の下社まで境内から一步も出なかった。) ・稚児緋狩衣5枚 寄進 親窓会
	49年(1974)	・「陵王」が新潟日報元旦紙面一面全体を飾る。(1月1日) ・境内に消火栓を新設。 ・板画家棟方志功氏、取材の途次、白山神社に立ち寄り、拝殿のスケッチを行う。(5月)	・選択芸能指定による記録作成:『能生白山神社舞楽』誌印刷(所作法、唱歌集) ・『日本庶民文化史料集成』に能生白山神社舞楽が掲載される。(近藤忠造氏解題・校注) ・『越佐研究』に近藤忠造著「御祭礼入用帳」掲載 ・NHKテレビ「県境シリーズ」で能生白山神社舞楽が放送される。(6月)
	50年(1975)	・坪井良平氏(文化財保護審議会専門委員)、「汐路の鐘」調査	
	51年(1976)	・梵鐘「汐路の鐘」新潟県文化財工芸品に指定される。(3月31日) ・銅造十一面観音「平安鎌倉の金銅仏像展」(奈良国立博物館)に出陳(4月29日～5月30日)	

時代	年号(西暦)	能生白山神社関連	春季大祭関連
昭和時代(一九二六～一九八九)	昭和51年(1976)	・お開帳(7月21日～27日)	
	52年(1977)	・自然保護シリーズ記念切手「ヒメハルゼミ」が発行される。(8月15日)	・社参の行列「ありのみ荘」より出発。 ・毛槍3本、獅子頭修復 寄進 漁業関係者
	53年(1978)		・地久狩衣(黄ちり緬)4着寄進 黒丑会
	54年(1979)		・神輿三体修復(2月)705万円 寄進 氏子 ・輪歌・児抜頭狩衣5着、笛10管 寄進 新潟放送文化振興基金 ・弓法楽長衣4着 寄進 橋本弘一 ・弓法楽肩衣4着 寄進 蓑田早人(茨城県)
	55年(1980)	・神社南面に「能生町歴史民俗資料館」できる。	・「糸魚川・能生の舞楽」が国指定重要無形民俗文化財に指定される。(1月28日) ・弓法楽差抜5着 寄進 茫洋会
	56年(1981)	・銅造十一面観音立像、木造泰澄大師坐像が新潟県文化財に指定される。(3月27日)	・陵王面二面、納曾利面二面、能抜頭面一面が新潟県指定有形文化財に指定される。(3月27日) ・能抜頭差抜1枚、納曾利長下着2枚 寄進 立身会
	57年(1982)		・『能生白山神社春の大祭』誌発行(3月31日能生町教育委員会) ・泰平楽長着4枚 寄進 六七会 ・稚児紋付道中着5枚 寄進 日馬辰夫 ・四神旗四旒 寄進 吉川藤次郎
	58年(1983)	・「北前船と大阪展」に「ハガセ船図絵馬」出展(大阪市博物館)(7月)	・『能生白山神社舞楽・森本神楽』誌発行(3月31日能生町教育委員会) ・陵王中啓1本、稚児中啓5本、輪歌花4本、稚児束帯5本 寄進 加藤久二、岩田忠兵衛 ・泰平楽肩衣4着 寄進 上松一始 ・御宝吹流し2旒 寄進 三十三会
	59年(1984)	・「徳川三代将軍家光他朱印状」・「文亀三年劔社棟札」が能生町文化財に指定される。(5月29日) ・秋葉神社御幕 寄進 東柏会	・稚児道中袴5着 寄進 室橋留吉
	60年(1985)		・文化庁の伝承活動補助事業(昭和60、61、62年の三年間):資料の作成、伝承者養成事業、舞楽面購入(5面)、舞台修繕工事、舞楽衣装、舞台水引購入等(1,500万円) ・稚児練習用差抜5着 寄進 室山ウメノ
	61年(1986)	・岩井宏実氏(国立歴史民俗資料館教授)船絵馬調査に来社 ・本殿、強風による落石で柿葺屋根一部破損。応急処置し、翌春修復する。(11月)	
	62年(1987)	・同上屋根修復(3月) 修復完了後、遷座式行われる。(4月) ・船絵馬93点、船額4点が国指定重要有形民俗文化財「能生白山神社の海上信仰資料」に指定される。(3月3日)	・『能生白山神社舞楽調査報告書』(能生町教育委員会)発行(3月)(補助事業) ・『白山神社春季大祭記録集(I)』発行、同写真展を秋葉神社で開催(4月) ・舞楽記録保存用映画作成(補助事業) ・伝承活動補助事業完了。昭和60年からの同事業の完了を記念して、能生町文化体育館で舞楽発表を開催。(10月18日) ・納曾利二面(作 吉川花意) 寄進 室川右京 ・とり兜(泰平楽)4頭 寄進 中村宇平
	63年(1988)	・『能生白山神社の船絵馬』(能生町教育委員会)発行される。(7月1日)	・烏帽子 寄進 中村城司 ・獅子頭 寄進 亥子会(本厄男子)

時代	年号(西暦)	能生白山神社関連	春季大祭関連
平成時代(一九八九)	平成元年(1989)	・「 ^{かみえちご} 上越後の懸仏と経塚・供養塚出土品展」懸仏2点、八稜鏡出展 上越市立総合博物館(7月30日～8月27日)	
	2年(1990)	・(財)元興寺文化財研究所保存科学センター(奈良県)に於いて船絵馬93点、船額4点を平成2～4年の3年間に亘って修理する。(修理担当:山内章氏他)	・指塩が12月末で氏子でなくなり、「三ヶ字」から大王・大道寺の「二ヶ字」となる。
	3年(1991)	・御旅所・社務所建設事務局発足(2月) ・神社運営費として、一世帯月200円を4月1日より徴収開始される。 ・「花本大明神」芭蕉石碑、才蔵山から境内へ移設(4月)	・本年から春季大祭の貝吹き2名と白丁7名を能生地区で出すことに決定。 ・大太鼓 寄進 浦沢義子
	4年(1992)	・船絵馬の修理完了する。 ・御旅所・社務所完成竣工式、祝賀会。(総工費7,500万円、4月23日)	・社務所が竣工し、稽古は拝殿ではなく社務所で行うことになる。 ・太鼓場 寄進 真部虔司 ・陵王面(作 吉川花意) 寄進 室川諭
	5年(1993)	・滋賀県大津市船絵馬展に「はがせ船図絵馬」出展(7月27日) ・船絵馬修理完了を記念し、マリンドリーム能生で「船絵馬展」行う。 ・真榊老向 寄進 鶏頭会 ・真榊老向 寄進 八九会	・「第68回民俗芸能公演」東京国立小劇場にて7曲上演(6月5日～6日) 6月5日:童羅利、輪歌、陵王 6月6日:振舞、候礼、能抜頭、泰平楽
	6年(1994)	・町村合併40周年記念事業として、社務所に於いて船絵馬の一般公開を行う。(10月1日～10日)	・県アジア文化祭に舞楽出演 於 新潟県民会館(8月6日) 於 長岡厚生会館(8月7日) 於 上越文化会館(8月9日) ・四神旗の支柱(四基) 寄進 笑福会二基、九十会一基、猪士会一基
	7年(1995)		・第1回糸魚川・能生舞楽発表会 於 糸魚川市民会館(11月5日) ・弓・矢2組(小道具用) 寄進 午未会
	8年(1996)	・環境庁の『残したい日本の音風景百選』に「尾山のヒメハルゼミの鳴き声」が選ばれる。(6月) ・氏子総代が5人体制になる。(楽長、区長連合会長が加わる。)	・第2回糸魚川・能生舞楽発表会 於 糸魚川市民会館(11月17日) ・大王地区から初めて稚児上がる。 ・小泊獅子舞衣装新調(小泊地区積立) ・花天冠3基 寄進 子刃会
	9年(1997)		・第3回糸魚川・能生舞楽発表会 於 糸魚川市民会館(11月9日) ・新潟県の伝統民俗芸能等後継者育成補助事業(3年間実施) ・能生地区から出す白丁の数が14名になる。 ・能生獅子舞衣装新調(獅子舞保存会積立) ・長柄6本 寄進 杉田初雄
	10年(1998)	・『能生町の文化財』(能生町教育委員会)発行(9月30日)	・本田安次著作集『日本の伝統芸能』第16巻に「能生白山神社の舞楽」が掲載 ・太刀・鉾 寄進 三二三会 ・「能生白山神社春季大祭」記録ビデオ作成(能生白山神社、企画協力 能生町教育委員会)
	11年(1999)	・神社運営委員会が設立され、総会が行われる。(3月18日)	・本年より稚児前半の稽古は合宿しないこととなり、期間中は各自で登下社。前半登下社時の修祓は行う。 ・大太鼓 寄進 高橋佐吉

時代	年号(西暦)	能生白山神社関連	春季大祭関連
平成時代(一九八九～)	平成12年(2000)	・この年以後、毎年、拝殿屋根の茅を部分ごとに修葺始める。	
	14年(2002)		・新潟日報「日展レセプション」新潟オープニングに「陵王」出演 ・地域伝統芸術等保存事業(記録保存映像ビデオ作成)(財)地域創造補助事業
	15年(2003)		・少年団袴7着 寄進 室川諭 ・「奴奈川姫の里」伝統芸能フェスティバルに「白山神社舞楽」出演 於 青海町きららホール(11月30日) ・伝統文化子ども教室(文化庁委嘱事業) ・能生白山神社「泰平楽」と小國神社(静岡縣・森町)「太平楽」との比較研究(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター) ・法被20枚 寄進 東柏会 ・持花(輪歌用) 寄進 平成15年度稚児親一同
	16年(2004)	・拝殿前灯籠1対修復・蛇の水の龍のヒゲ再建(11月)高岡市梶原製作所 ・白山神社所蔵文化財(仏像・舞楽面)調査、新潟県立近代美術館々長水野敬三郎氏他(11月27日)	・陵王面外五面、国立文楽劇場(大阪)展覧会に展示 ・法螺貝 寄進 亥子会(46・47年生女) ・児抜頭・輪歌狩衣と襦袢5着 寄進 白龍会
	17年(2005)	・拝殿前灯籠石脚台1対 寄進 西戌会(1月14日) ・本殿屋根(26㎡)修復終了(平成16年着工、国・県・町補助対象) ・氏子総代3人体制に戻る。 ・NHKテレビ(全国放送)シリーズ「さわやか自然百景」に尾山のヒメハルゼミが取り上げられる。(15分間・9月)	・本年より稚児後半平日の稽古は午後のみとなる。(学校給食後、神社へ戻る。) ・御饗上げ用渡し板6枚 寄進 村井ヨシ子 ・『能生白山神社春季大祭資料集』発行 室川諭(12月1日) ・『能生白山神社の祭礼と舞楽―祝祭空間の演出―』発行される。板垣俊一著(12月1日)
	18年(2006)	・小冊子『能生白山神社 略史・文化財・特殊神事』(能生白山神社文化財保存会)が発行される。(6月) ・巖島神社式年祭(本開帳) 7月13日～19日(16日大祭) 15日～17日 宝物展 (宝物殿・拝殿・社務所にて開催) ・本殿の外縁に安置されていた狛犬1対を拝殿上段の間に移す。(9月) ・「中世人の生活と信仰 越後・佐渡の神と仏」展 和鏡2点・懸仏2点・銅造菩薩坐像2点出展 新潟県立歴史博物館(9月30日～11月12日) ・「新潟の仏像」展 木造聖観音立像・銅像十一面観音立像・懸仏2点・木造泰澄大師坐像・舞楽面4面出展 新潟県立近代美術館(9月30日～11月12日) ・『本開帳記念DVD、写真集』発行(12月)	・本開帳記念舞楽共演開催 「天王寺舞楽と能生白山神社舞楽」 於 能生マリンホール(7月15日) 天王寺舞楽：蘭陵王・納曾利・抜頭・還城楽 能生舞楽：振舞・輪歌・陵王(天王寺楽所「雅亮会」小野功龍理事長以下21名が来能生。白山神社境内舞台上、照明を用意し、夕方から夜間にかけての共演を予定するも、荒天のため急遽能生マリンホールに移動して実施する。)
	19年(2007)	・かがり火3基 寄進 亥子会(還暦)以後、祭事にかがり火を使用する。	・獅子舞衣反・四神旗一組 寄進 亥子会(還暦)(1月14日)奉納を記念し、1月14日夜に拝殿で獅子舞が舞われる。 ・『能生白山神社春季大祭記録集(Ⅱ)』(本誌)発刊(3月)

※年表作成にあたり、能生町教育委員会発行：「能生町史」・「能生白山神社春の大祭」・「能生白山神社舞楽報告書」・「重要文化財白山神社修理工事報告書」(同修理委員会)・「西頸城郡誌」(名著出版)・「頂正越後頸城郡誌稿」(豊島書房)・同人誌「汐路」・「翡翠」(能生町ふるさと学習サークル)・故室川右京調査資料等を参考にした。